

初夏から梅雨の頃、草地の片隅に咲くムラサキツユクサは、やや大ぶりな三枚の花弁を広げながら、その中心部に驚くほど精巧な“小宇宙”を隠しています。北アメリカ原産のツユクサ科ムラサキツユクサ属 (*Tradescantia ohimensis*) の多年草で、日本には観賞用として導入されましたが、今では庭先や道端でも親しまれる初夏の花です。和名は「紫露草」と書き、朝露を思わせるみずみずしさに由来します。

この接写写真では、淡紫色の花弁の中央に並ぶ六本の雄しべがよくわかります。黄色い葯を載せた雄しべは、まるで小さな灯火のように配置され、その根元には青紫色の細かな毛が無数に伸びています。この雄しべの毛はムラサキツユクサ最大の特徴の一つで、肉眼でも美しいですが、拡大すると繊細な糸状構造が際立ち、花全体を柔らかな光で包むようです。中央の白い雌しべは柱頭へと続き、受粉という生命の営みの中心を担います。

一つの花は朝に開き、午後にはしぼむ一日花ですが、次々と新しい花を咲かせるため、株全体としては長く花期が続きます。また、この植物は美しいだけでなく、雄しべの毛の色変化が突然変異や環境変化を捉えやすいことから、遺伝学や環境科学の教材としても重要です。梅雨空の下で静かに咲くこの花は、風景を彩るだけでなく、花の構造、進化、そして科学教育の入口としても、実に奥深い存在です。

(2026年5月中旬／文京区お茶の水女子大学構内)

